

怒りの表現，モダニストの表現

—ヴァージニア・ウルフの小説における語りについて*

野口 祐子

第1章 怒りの表現について—フェミニストの立場から

Who blames me? Many, no doubt; and I shall be called discontented. I could not help it; the restlessness was in my nature; it agitated me to pain sometimes.

...

It is in vain to say human beings ought to be satisfied with tranquillity: they must have action; and they will make it if they cannot find it. Millions are condemned to a stiller doom than mine, and millions are in silent revolt against their lot. Nobody knows how many rebellions besides political rebellions ferment in the masses of life which people earth. Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex.⁽¹⁾

この*Jane Eyre*, 第12章からの引用は、女性が自由と権利を望むことの正当性を訴えた文章である。これは内容の上で、Virginia Woolfが*A Room of One's Own*と*Three Guineas*で披露した思想と矛盾するものではない。しかしWoolfは*A Room of One's Own*の中で、この文章を批判しているのである。なぜ自分と同じ信念を主張しているものを批判しなければならなかったのか。この疑問から出発して、Woolfの小説創作と思想との関係を論じたいと思う。

WoolfのCharlotte Brontë 批判は、女性作家による怒りの表現という問題との関連で、特にフェミニスト批評の立場から最近しばしば取り上げられている。そこでまずWoolfが問題にしているのは何かを概観してみよう。

*Jane Eyre*中の上記の部分について、そこでは作者Brontë 自身の憤懣があからさまに現れているために、主人公Janeの語りであるはずのところに、作者の生の声が突然割り込んだ格好になる。そんな風に怒りが生の形で小説の中に現れるべきではない、というのが批判の趣旨である。

One might say, I continued, laying the book down beside *Pride and Prejudice*, that the woman who wrote those pages had more genius in her than Jane Austen; but if one reads them over and marks that jerk in them, that indignation, one sees that she will never get her genius expressed whole and entire. Her books will be deformed and twisted. She will write in a rage where she should write calmly. She will write foolishly where she should write wisely. She will write of herself where she should write of her characters. She is at war with her lot.⁽²⁾

小説の内的統一のためには、確かにJane自身の語りという統一性は守られねばならなかった。*Jane Eyre*の問題の部分で読者が聞くのは、まだ精神形成の出発点から歩み出して間もない若いJaneの、心の中のつぶやきではなく、Thornfield Hallにやって来て間もなく、そこでの生活に対して期待と不安に胸をいっぱいにしてながら館からの景色に感動している声でもない。また青春のただ中であって、やがて恋愛という形で具現する未知の世界を予感する声でもない。私たちが聞くのは、大人の女性の、しかも才能に恵まれながらそれを十分に発揮できない、活動的な生き方をしたいと思ってもできない女性の、社会に対する怒りに満ちた声である。この部分ではWoolfの指摘する通り、Brontë 自身が社会に対する怒りの声を張り上げすぎている感がある。しかもこの部分に至るまでに、男性中心社会に対するこのような批判や憤懣をはっきりした形で若いJaneに意識させる下地が作品中に十分用意されていないがために、一層唐突であるという感は免れない。*Jane Eyre*に対するこの批判は、それゆえ小説の芸術的統一性という見地から言えば、至極もつともなことに思われる。

ところが問題はそう簡単ではない。なぜなら、このようにBrontë を批判しているWoolf自身も、怒りというものを自分の作品の内はどう取り込むべきかという問題を抱えていたからである。そして彼女の作品自体も、怒りの表現のしかたについて批判されているからである。中でも最も激しく怒りを表現したとされる*Three Guineas*については厳しい批判が出たが、ここではとりあえず話を小説に限ることにしよう。

それではWoolfの小説において、怒りはどのように扱われたのだろうか。まず一例として、後期の作品*The Years*についてみれば、この作品は執筆当初Woolf自身が“essay-novel”と名付けていることからわかるように、もともと虚構の部分とエッセイの部分を交互に置くという構成になっ

ていた。ところが結局 Woolf はそれを断念し、現在ある形の *The Years* という虚構だけから成る作品を完成させた。ここで私たちの興味を引くのは、彼女が “essay-novel” を断念した動機は何だったのかという点である。1935年4月14日の日記には、“One can't propagate at the same time as write fiction”, “As this fiction is dangerously near propaganda, I must keep my hands clear” と書いているが、⁽³⁾ 彼女は何故政治的議論と小説創作を共存させることができないと考えたのか。小説から削除された部分が土台となって、怒りに満ちた *Three Guineas* が書かれたことから察するに、エッセイ部分が削除されたり虚構へ組み入れられたことによって、最終的な *The Years* のテキストから消えた重要な要素は、怒りではなかったか。そうだとすれば怒りを抑圧する理由はどう説明されるべきだろうか。

最終的に *The Years* の「1880年」の章になる前段階であるエッセイ付きの草稿が *The Pargiters* として世に出ているが、⁽⁴⁾ この草稿では登場人物の女性たちが感じる怒り或いはそれに近い感情が、かなり明確な形で現れている。さらにエッセイの部分ではそれに対する分析が加えられているのだが、その分析は怒りの原因をはっきりと男性中心社会の構造に求めている。ところが最終的に完成した *The Years* では登場人物たちの怒りは描かれても、その社会的な意味を説明されることはない。むしろ彼女たちの怒りは、外面的な生き方だけでは窺い知ることのできぬ内面生活、より具体的には彼女たちの屈折した思いや密かに持っている信念を垣間見させるきっかけとなっている。それゆえそこに作者自身の怒りを読み取ることは難しい。怒りの社会的意味、作品の持つ社会批判の要素は、あくまでも作品全体から汲まれるものであって、そこに作者の声が直接聞こえることはないのである。

このように怒りの表現が作者の自己表現から切り離されて、虚構の中に埋め込まれていることについて、その理由を説明するに *A Room of One's Own* 中の *Jane Eyre* 批判を充てるだけでは十分ではないだろう。現にそれに納得できない批評家に Elaine Showalter がいる。彼女は、Woolf の怒りの抑圧は女としての経験を直視することから逃げる態度であると批判する。

Stripped of its anger, femininity would spread out over fiction to become a smooth and absorbent surface.⁽⁵⁾

怒りを削除することは、女としての経験を直接表現することから「女らしさ」の中へと逃げ込むことに他ならないという議論である。さらに Showalter は、*A Room of One's Own* 中の、女性が小説を書く際に怒りに身を任せることは致命的であるという部分を引用した後、それが積極的な意味を持つ発言ではなく、作者 Woolf の生きた環境と Bloomsbury の掲げる思想に支配された発言であると指摘する。

In many respects Woolf is expressing a class-oriented and Bloomsbury-oriented ideal—the separation of politics and art, the fashion of bisexuality.... But there is also

more than a hint of fear in her warning. She had taken to heart the cautionary tales to be found in the lives of earlier women writers. She had seen the punishment that society could inflict on women who made a nuisance of themselves by behaving in an uncivilized manner. It seems like a rationalization of her own fears that Woolf should have developed a literary theory that made anger and protest flaws in art.⁶⁾

ここで“separation of politics and art”はWoolf自身が*The Years*執筆の際に持った信念でもあるが、これはShowalterにとっては芸術家の社会的現実からの逃避を意味する。また“fashion of bisexuality”は女性としての経験からの逃避を意味する。そして怒りの隠蔽は、社会から制裁を受けることに対する恐れを動機としているということになる。

しかしWoolfの言う「芸術と政治の分離」は単純に社会的現実からの逃避ということになるのだろうか。またフェミニストとしての見地を放棄することになるのだろうか。さらに、Woolfは*A Room of One's Own*で社会が女性作家に対してかけてきた有形無形の圧力を問題にしているが、問題にする時点で既にWoolf自身の抱く恐れについては客観的分析がなされているのであり、もはや恐れにとらわれているとは考えられないのではないか。Showalterの指摘に関しては、以上のことが疑問となる。

一方、同じくフェミニスト批評の立場をとりながら、Woolfを弁護するのがJane Marcusである。

We have yet to examine as critics just how full of social criticism her work was; preoccupation with its beauty has obscured its terror. But we must finally acknowledge that it was anger that impelled her art, and intellect that combed out the snarls, dissolved the blood clots, and unclogged the drains of that great sewer of the imagination, anger.⁷⁾

Marcusは、フェミニスト批評以前に形成された美を追求する作家というイメージの裏に隠れていた「怒れる作家」としてのWoolfを見出さねばならないと説く。そこでMarcusによって出現させられるのは、先ほどの現実からも自らの怒りからも逃避してひたすら美に仕える女官というWoolf像からは程遠い、怒れる社会主義フェミニストの偶像である。気になるのは、怒りこそがWoolf芸術の源泉であると規定することによって、余りにもWoolfをMarcus自身の理想とする作家像へと祭り上げすぎているのではないかという点である。

そのMarcusは、フェミニスト批評家の間でWoolfのBrontë 批判は不当ではないかという声が上がっているのを受けて、こう弁護する。

But Woolf's argument is more complex; Woolf's anger is directed at Haworth parsonage, not at Brontë. She felt that Brontë was a writer of genius and that she

might have been a Shakespeare if she had some money, travel, and experience. Far more space in [*A Room of One's Own*] is filled with analysis of her own anger and men's anger at women. She is sympathetic to Brontë.⁽⁸⁾

この引用中、怒りの主体はBrontëではなく、“Woolf's anger”と表現されていることに注意したい。WoolfはBrontëに同情して、Brontëが作品の中で怒りをぶつけている彼女を取り巻く環境に対して、Woolf自身の怒りを向けているのであって、Brontëの怒りはWoolfによって共有されているというのである。*A Room of One's Own*では、Woolf自身が怒りを正面から扱っているではないか、それゆえBrontëの怒りにも理解を示しているのだ、という議論である。

しかしこの議論は、*The Years*の執筆過程に見られるようにWoolfが小説とエッセイとを区別して考えていたこと、そして虚構においては怒りのあからさまな表現は慎まなければならないと考えていたことを無視している。WoolfはBrontëに同情的であっても、Brontëの書き方はやはりまずいと考えていたのである。

ShowalterとMarcusが、Woolfについて輪郭のはっきりした作家像を作り上げ、議論の展開をその作家像によって限定されているように思われるのに対し、Mary JacobusはWoolfの*Jane Eyre*論のエクリチュール自体に目を向ける。次の引用は、*Jane Eyre*の問題の部分について、それが*A Room of One's Own*の中でどのように機能しているかを論じている。

The unacceptable text gets the blue pencil from Virginia Woolf...but it also opens up a rift in her own seamless web. What she herself cannot say without loss of calmness (rage has been banned in the interests of literature) is uttered instead by another woman writer. The overflow in *Jane Eyre* washes into *A Room of One's Own*.... Editing into her writing the outburst edited out of Charlotte Brontë's, Virginia Woolf creates a point of instability which unsettles her own urbane and polished decorum.⁽⁹⁾

*A Room of One's Own*は、表向きは*Jane Eyre*のテキスト上の不整合性を指摘しながら、*Jane Eyre*の怒りの発現部分を自己のテキストに嵌め込むことによって、同時に*Jane Eyre*の表現する怒りを呈示することになる。それゆえ、*Jane Eyre*のテキストを嵌め込む行為自体が、自らの表面上の議論を解体し、表面上の整合性を乱しているというのである。WoolfのBrontë批判は、女性作家が駆使する隠蔽と表現の巧妙な組み合わせの一例としてここに挙げられている。このJacobusの議論に従えば、確かにこのBrontëへの言及部分は、*A Room of One's Own*中の“we think back through our mothers if we are women”⁽¹⁰⁾という有名な一節が示す女の世界観の女による継承を体現し、また女性の手になる作品間のインターテクスチュアリティによる連帯をも体現するものとなる。つまりBrontëという19世紀の女性とWoolfという20世紀の女性との連帯と、テキスト

間の共時的な連帯とを同時に実現すると考えられるのである。

私たちは、Marcusが言うように Woolfが Brontë に同情的であったことを認め、そしてMarcusやJacobusが指摘するようにWoolfもBrontë の怒りを共有していたということも認めることはできる。しかしそれでも、Woolfが小説を実践する者の眼で見て*Jane Eyre*の問題の部分の語りは具合が悪いと考えていた事実は消えないのである。そこで私たちは、WoolfのBrontë 批判に表わされたWoolf自身の怒りの有無ではなく、小説創作上の信念を問題にしなければならない。

Woolfの小説創作上の立場については、Patricia Stubbsの次のような批判がある。

Her aesthetic and stylistic experiments should not be underrated—along with her contemporaries Dorothy Richardson and James Joyce she transformed the narrative structure of the English novel—but I think it is true, in spite of what she herself believed, that Virginia Woolf's aesthetic theories actually devitalized her fictional world.

Her primary commitment as a novelist was, quite properly, artistic. Our great misfortune, and possibly hers, is that her artistic theories could not comfortably accommodate her feminism and that she apparently had to choose between them.⁽¹¹⁾

Stubbsは*A Room of One's Own*などの評論で披露されたフェミニストの見地と、小説創作で実行されていることが相容れないものだとする。そしてWoolfは自ら唱えた小説理論に縛られたために、フェミニズムを小説の中に持ち込むことができなかつたというのである。これは先に挙げたShowalterの“separation of politics and art”についての議論同様、モダニスト小説の実践者であるWoolfが自らの内にあるフェミニズムを抑圧したという意見である。

しかし果たしてモダニスト芸術の追求と、フェミニストとしての表現は、Woolfの小説において両立し得なかつたのか。女としての経験の、そして怒りの、直接的な表現のみがフェミニストとしての表現たり得るのか。果たして*A Room of One's Own*や*Three Guineas*などの評論の分野で明らかにされたフェミニストの立場と、Woolfが小説において実践したことの間には、本当に隔たりのあるのだろうか。

第2章 モダニストの語りによる怒りの表現

Woolfはモダニスト小説の追求において、フェミニストとしての自己を抹殺せねばならなかつたのか、それともフェミニストとしての見地を表現することに成功しているのか。さてこの問題を論じるために、ここでWoolf小説の語りに注目したい。

Woolfが短篇において習作を試みた後、*Jacob's Room*を初めとして積み重ねていった小説創作上の実験については様々な角度から論じることが可能だが、中でもそれらをモダニスト小説たらしめている大きな特徴のひとつは、語りの技法上の工夫であろう。そこでWoolfの小説がフェミニス

トとしての表現を担うことに成功しているかどうかを吟味するために、小説の語りがそのような表現を拒絶する性質のものなのか、それとも語りの技法上の洗練とフェミニストとしての表現は矛盾するものではないのか、考えてみる必要がある。

そこでまず、先ほどから問題にしている怒りの表現が Woolf の小説の語りによってどう扱われているかを見てみよう。Mrs. Dalloway や To the Lighthouse が所謂「意識の流れ」手法で書かれているとは言っても、厳密には全て登場人物たちの意識の描出だけで成り立っているのではなく、人物たちの意識の流れを制御し、選別し、説明を加える語り手が存在することはよく指摘されているので、繰り返し論じるまでもないが、ここではそういう語り手が存在する語りにおいて、登場人物の怒りがどのように表現されているのか、幾つか例を挙げて考察しよう。

はじめに、Mrs. Dalloway からの一節である。

But [Septimus] remembered. Bradshaw said, “The people we are most fond of are not good for us when we are ill.” Bradshaw said he must be taught to rest. Bradshaw said they must be separated.

“Must”, “must”, why “must”? What power had Bradshaw over him? “What right has Bradshaw to say ‘must’ to me?” he demanded. “It is because you talked of killing yourself,” said Rezia. (Mercifully, she could now say anything to Septimus.)

So he was in their power! Holmes and Bradshaw were on him! The brute with the red nostrils was snuffing into every secret place! “Must” it could say! Where were his papers? the things he had written?⁽¹²⁾

場面は Septimus が自殺する直前のひと時、外見は平穏な状態にあって、Rezia と久しぶりに夫婦らしくくつろいでいるところである。Mrs. Dalloway は社会批判を重要な要素として持っていると考えられるのだが、中でも Septimus はアウトサイダーとしての視点をテキストに導入することによって、社会の権力構造とそれが個人に与える影響を浮き彫りにするという重要な機能を果たしている。⁽¹³⁾ この作品に表現された社会観は、Woolf が A Room of One's Own や Three Guineas で示したフェミニストの立場からの社会観に通じると思われるのだが、その表現の仕方は、あくまでもモダニスト的語りの技法に沿ったものである。上の引用では、そこに現れた Septimus の怒りは Bradshaw と Holmes に向けられている。繰り返される “must” という語が示すように、Bradshaw が自分に彼の人生観を押しつけることに対する怒りである。しかしこの怒りは、その原因をそれ以上分析して追求されることがない。限られた語彙と短い文の連なりが、Septimus という登場人物の怒りを、彼自身の素朴な表現らしく伝えている。読者は、Septimus の怒り、精神的苦痛、幻覚、そして周囲の人間の彼に対する見方の全てを総合することによって、Septimus の怒りが暗示する彼自身には見えない意味を見出していくのである。

Mrs. Dallowayの語り手は、読者にSeptimusの怒りが正当なものであるという価値判断を与えることも、それを社会批判に結びつけることもしない。また怒りはモダニスト的語りによっては直接表現されることはなく、ましてや作者が怒りの声を発することもない。Septimusの怒りを或る特定の社会観に結びつけるのは、この作品を読み解く作業を進める読者の仕事なのである。

もう一つ、怒りを表現して印象深い一節を取り上げよう。次は*To the Lighthouse*の冒頭で、幼いJamesが父親のMr. Ramsayに対して激しい敵意を抱くところである。便宜上、各文に番号を付けておく。

- ①Had there been an axe handy, a poker, or any weapon that would have gashed a hole in his father's breast and killed him, there and then, James would have seized it.
②Such were the extremes of emotion that Mr. Ramsay excited in his children's breasts by his mere presence; standing, as now, lean as a knife, narrow as the blade of one, grinning sarcastically, not only with the pleasure of disillusioning his son and casting ridicule upon his wife, who was ten thousand times better in every way than he was (James thought) , but also with some secret conceit at his own accuracy of judgement.
③What he said was true. ④It was always true. ⑤He was incapable of untruth...⁽⁴⁾

まず語りの分析をしておこう。①の文には激しい憎悪が現れているが、ここで手元に武器があれば父の胸を一突きしただろうと判断しているのは誰なのか。James自身か、それとも語り手がJamesの憎悪の激しさを、このような具体的なイメージを使って表わしていると考えべきなのか。また②の文において「ナイフのように瘦せていて、その刃のように“narrow”（尖っている、偏狭だ）」と感じているのは語り手か、Jamesか、それともJamesに同情して夫に冷たい眼差しを向けているMrs. Ramsayだろうか。同様にMr. Ramsayが「明日は天気良くない」と言ったのは、「息子に幻滅を味わわせ」、「妻をばかにして喜ぶ」ためであったという判断は全知の語り手の客観的判断なのか、それとも彼に苛立ったJamesか或いはMrs. Ramsayの判断を語り手が代弁していると考えべきか。さらに③④⑤でMr. Ramsayが真実を曲げることのできない人間であると執拗に繰り返されているのは、客観的判断ととるべきか、彼のそういうところに辟易している者の述懐と読むべきか。

このような、疑問づくめで答えの出ない分析からもわかるように、Mr. Ramsayに対する怒りは本物であって十分読者の同情を得るとしても、それが単純に、彼に対する客観的で正しい批判の現れとは断定できないのである。この箇所には、母性原理と父性原理の対立、Mrs. Ramsayの体現する非理性的な原初的創造性とMr. Ramsayの体現する西欧近代的理性に基づいた文明の不毛という対立を読み取ることはたやすい。そしてJamesと共に“ [She] was ten thousand times better in every way than he was ”と判断して、Mrs. Ramsayの代表する母性原理の方に軍配を上げることもできよう。しかしMrs. Ramsayの方がずっといい人間だという価値判断をJamesと共有す

べきだという確信を語り手は与えない。先ほどの分析でみたテキストの視点の揺れは価値判断の揺れを生み、例えば母性原理>父性原理といった図式によって性急に判断を下すことをためらわせるのである。このテキストの語りも、フェミニストの立場からは批判されるべき西欧近代の理性偏重を体現するMr. Ramsayに対して、決定的に優位な地位にあって客観的に批判するということをしない。Woolfの用いるモダニスト的語り手は、自ら判断を下さないのである。

次に、Woolfが執筆の過程で社会に対する怒りと小説創作の分離を強く意識したと思われる*The Years*からも一例を引いておこう。次に挙げるのは「1917年」の章の一部である。SaraはNorthが戦地に赴くために別れを告げに来た時に胸中に湧き上がった苦々しい思いを、親類の者たちに説明する。

There was North—North,” she raised her hand to her head as if in salute, “cutting a figure like this.... ‘What the devil’s that for?’ I asked. ‘I leave for the Front tonight,’ he said, clicking his heels together. ‘I’m a lieutenant in—’ whatever it was—Royal Regiment of Rat-catchers or something....And he hung his cap on the bust of our grandfather. And I poured out tea. ‘How many lumps of sugar does a lieutenant in the Royal Rat-catchers require?’ I asked. ‘One. Two. Three. Four....’”

She dropped pellets of bread on to the table. As each fell, it seemed to emphasise her bitterness. She looked older, more worn; though she laughed, she was bitter.⁽¹⁵⁾

Saraの感じた“bitterness”は*Three Guineas*の全体から染み出る怒りと同じものであろう。それゆえフェミニスト的な見地を表わしていると言える。しかしだからと言って、Saraの痛みを唯一の正しい反応であるとする語り手の判断が示されているわけではないのである。読者はこのすぐ後に、“How unfair you are”, “Prejudiced; narrow; unfair”とSaraを優しい調子で諷めるNicholasの声を聞く。しかもSaraの怒りを正当なものとして受け取るべきか、Nicholasの言うように偏狭なものと取るべきか、語り手は判断の根拠を与えてくれない。むしろ読者は、従軍するというひとつの行為に対する評価が多様であること、個人的な思い、国家の一員としての思い、男として女としての思い、そして人類という視野に立つての思いのそれぞれが、人々の間に、また一人の人間の内にも宿り、矛盾し合う状況を意識させられる。ここでも善/悪、正/誤といった二項対立の図式による判断は慎重に避けられているのである。

さて、これらの例に見られたモダニスト的語りによる怒りの曖昧な表現は、怒りの隠蔽、フェミニスト的表現からの逃避と呼ぶべきものであろうか。それともそこに積極的な価値が見出されるだろうか。多視点を持ち込み、意図的に価値判断も自己主張も避ける語り手は、フェミニストとしての見地を表わしていないのだろうか。

第3章 怒りの直接的な表現における語り手

前章で考察した意図的に曖昧さを生み出す語りがフェミニストとしての世界観を反映するものであるかどうか、この問題について考えるに当たり、ここでは先の例とは対照的な語りの部分を取り上げることによって、Woolf小説の語りの性質を捉える助けにしたい。

実は、先にモダニスト的テキストとして取り上げた*Mrs. Dalloway*の中に一箇所、先の例とは異質な語りが見れるのである。読者はこの小説を半ばまで読み進めていくと、突然語り手が語気を強めてSir William Bradshawを弾劾するのに出くわすのだが、その部分の語りでは、怒りはテキストの表層に現れ、言葉が重ねられるごとに語り手によって正当化され、明確になっていくのである。先の*Mrs. Dalloway*からの例では、Septimusの怒りは語り手によって弁護されることも、社会批判と結びつけて説明されることもなかった。Septimusの怒りから社会批判の視点を見出すのは読者の総合的な読解に委ねられていた。また*To the Lighthouse*からの例でも、テキストの表層に現れた怒りが全てMr. Ramsayを説明し、彼に対する正しい批判となるとは断定できなかった。*The Years*の怒りも、愛国主義を相対化すると同時に、そのテキスト内での扱い方によって反戦主義さえも相対化するのであった。しかし*Mrs. Dalloway*中のBradshawに関する問題の部分では、多視点の使用による価値判断の相対化もなく、全知全能の語り手が前面に出て自己の判断の正当性を主張するのである。

問題の部分は、BradshawがSeptimusの精神状態を診断し、自分の経営する療養所へ送り込むことに決めた場面の後から、Hugh Whitbreadの登場する場面に移るまでの4ページほどの部分である。⁽¹⁶⁾ まず語りの調子が変わるところから見てみよう。ここでも便宜上各文に番号を付けておく。

①The upkeep of that motor car alone must cost him quite a lot, said Septimus, when they got out into the street.

②She clung to his arm. ③They had been deserted.

④But what more did she want?

⑤To his patients he gave three-quarters of an hour; and if in this exacting science which has to do with what, after all, we know nothing about—the nervous system, the human brain—a doctor loses his sense of proportion, as a doctor he fails. (*MD*, pp. 109–110)

①, ②はSeptimusとReziaの言動を描写している。③は恐らくReziaの心理であろう。ところが④を境に、語り手のテキストに対する支配力が強まっている。⑤の文でまず顕著なことは、“we”の使用である。この“we”は、登場人物が自分を含めた特定の人々を指して使っているのではなく、全知の語り手が読者を仲間に入れるために、つまり視点を共有させるために用いている。これよりしばらくの間、読者は全知の語り手の語るがまを受け入れるべく期待されているのである。

Health we must have; and health is proportion; so that when a man comes into your room and says he is Christ (a common delusion), and has a message, as they mostly have, and threatens, as they often do, to kill himself, you invoke proportion; order rest in bed; rest in solitude; silence and rest; rest without friends, without books, without messages; six months' rest; until a man who went in weighing seven stone six comes out weighing twelve. (*MD*, p.110)

ここにも他の箇所にはない“we”と“you”の使い方が見られる。それらの使用によって語りは作品内世界を離れ、より一般的、抽象的な議論を進める。“Health we must have.”と断じているのは、一見全知の語り手のようだが、“and health is proportion”と続けるその論理はBradshawを代表とする精神科医の論理である。ここで“your room”や“you invoke proportion”という風に“you”が用いられているのは、Bradshawの価値観で物事を判断する場合の論理を示し、その論理が患者に対してかける圧力を示唆するためである。

このように表向きはBradshawの価値観に従いながら、それに従えばどうなるかを示して批判するやり方は、怒りの直接の発現とはならないと考えられるかもしれない。しかし実際には、Bradshawを辛辣な皮肉の対象とする語り手の立場は一貫しており、その皮肉の苦々しさ、“rest”が5回も繰り返されることにも現れる強い語気、そして登場人物の視点を離れた全知の視点、これらの要素が対象に一定の距離を置くべき風刺の枠を破り、語り手の怒りに満ちた単一の声を伝えるのである。

Proportion, divine proportion, Sir William's goddess, was acquired by Sir William walking hospitals, catching salmon, begetting one son in Harley Street by Lady Bradshaw, who caught salmon herself and took photographs scarcely to be distinguished from the work of professionals. Worshipping porportion, Sir William not only prospered himself but made England prosper, secluded her lunatics, forbade childbirth, penalised despair, made it impossible for the unfit to propagate their views until they, too, shared his sense of proportion.... (*MD*, p.110)

ここでまず目立つのは“proportion”という語の繰り返しである。このパラグラフだけで5回使われているのだが、問題にしている部分全体では“his sense of proportion”が3回、“a sense of proportion”が3回、“proportion”は6回も現れる。この繰り返しの執拗さは、まるで攻撃の意思をこめた連打のようである。

次に語り手についてだが、ここでも全知の語り手の物の見方に読者の見方を合わせるよう要求していると考えてよいだろう。語り手は読者の読み取るべき意味を限定し、Bradshawの代表する権力による抑圧を批判する立場をはっきりと示しているのである。

ここで少し引用を省略して、問題部分の終わりの方を見てみよう。

And then stole out from her hiding-place and mounted her throne that Goddess whose lust is to override opposition, to stamp indelibly in the sanctuaries of others the image of herself. Naked, defenceless, the exhausted, the friendless received the impress of Sir William's will. He swooped; he devoured. He shut people up. It was this combination of decision and humanity that endeared Sir William so greatly to the relations of his victims. (*MD*, p. 113)

“He swooped; he devoured”はBradshawを猛禽に喩えているのだが、この場合彼を滑稽な姿に喩えて卑小化しているとは、つまりBradshawから距離を置いて風刺しているようには思われぬ。猛禽のイメージが滑稽であるには余りにもBradshawの行為とそれを支えるイデオロギーが猛禽の威圧的で攻撃的なイメージと合致しすぎているからである。さらに続く“he shut people up”が単刀直入な強い調子の物言いで、風刺に傾く可能性を一層否定している。語り手の表わす憤怒は、“humanity”、“endeared”の皮肉な使い方や、患者を“his victims”と規定するところにも顕著である。

さて、*Mrs. Dalloway*の中に現れた怒りの噴出について見てきたわけだが、ここで私たちは再び*A Room of One's Own*中のCharlotte Brontëについての指摘を思い出してみなければならない。

Now, in the passages I have quoted from *Jane Eyre*, it is clear that anger was tampering with the integrity of Charlotte Brontë the novelist. She left her story, to which her entire devotion was due, to attend to some personal grievance.⁽¹⁷⁾

Brontëが作品中に表わした自らの怒りが、小説としての統一性を乱すことになっているのを、Brontëの小説家としての欠陥と見なしているわけだが、この指摘はそのまま*Mrs. Dalloway*のBradshawに関する部分にもあてはまるのではないだろうか。この部分における怒りの内容が作者の精神病患者としての経験をどれほど反映しているかは、ここでは問題にしない。専ら語りの質に注意を向けることにするが、この部分の語りは明らかに、他の部分で巧妙に判断を下すのを避け、視点の揺れによって読者にも安易な判断を下すのをためらわせる語りとは異質である。*A Room of One's Own*に示された批判に従えば、その異質さは作品の“integrity”を損なうものと言えるだろう。

しかしそれでは、Woolfの小説が目指す“integrity”とはどんなものなのか。

この“integrity”を芸術的統一性と考える場合には、本稿第一章で紹介したように、それに囚われたために女性としての表現をないがしろにしているという批判があった。その立場からすれば、

*Mrs. Dalloway*中の異質な語りの部分については逆に積極的な評価がなされるはずである。

その考え方通り、ShowalterはWoolfの自ら経験した“rest cure”に対する怒りが直接現れている点を評価している。

A great deal of her anger comes out in the portrait of Sir William Bradshaw, the Harley Street nerve doctor. Personal experience explains the inartistic lack of proportion most critics have noticed as a “flaw” in this fiercely vibrant section of the novel. ⁽¹⁸⁾

さらにBradshawに関する部分から引用した後に続けて、「他の批評家たちが欠陥と見なした部分」に対するShowalter自身の判断が示される。

She could hardly have expressed her feelings of victimization and rage more plainly. ⁽¹⁹⁾

ここで示された評価は、女性としての、特に社会の犠牲者としての経験と、そこから生まれる怒りが出来るだけ素直に“fiercely vibrant”に表現されるほどよいという判断基準に基づいている。その場合“inartistic lack of proportion”は否定的要素とは見なされない。

この議論ではWoolfの語りの手法は芸術上の追求にすぎず、何ら思想的根拠を持たないことになっているが、果たしてそうであろうか。

先の例で取り上げたSeptimus, James, Saraの怒りは、第一に彼ら登場人物がその時その場所で抱いた怒りの感情としてあった。その感情がどれほど客観的に見て正当なものなのか、或いはある社会観の反映であるのか、また語り手がその怒りを共有しているのかは曖昧であった。しかしその曖昧さは作者が自らの怒りを見つめることから逃避した結果生まれた曖昧さではなく、積極的な曖昧さとも呼ぶべきものであろう。即ちそれは、一元的な道德上の判断、二項対立の論理による割り切った判断というものを拒否する語りの性質の現れなのであり、これらの論理を否定するところにモダニストのテキストの論理が成立していると考えてよいだろう。

ところが Bradshawに関する部分は、その点でモダニストのテキストとは言い難い。怒りの表現は、例えば“offers help, but desires power”, “loves blood better than brick”, “for dominion, for power”, “that Goddess whose lust is to override opposition”といった抽象的な表現に傾き、SeptimusやReziaといった怒りを経験すべき当事者の言語表現力や認識力を超え、彼らの視点からも離れて、語り手が読者に対して一方的に呈示する社会批判の表現となる。ここでは作者の声を代弁する全知の語り手が判断を下すための権威が強まっているのである。

別に全知の語り手が作者の怒りを単刀直入に表してはならないなどと言っているのではない。問題は、Woolfによって編み出された語りの手法が担うはずの思想的根拠がここでは捨てられてい

るということである。そしてそれは Woolf 小説にとっての “integrity” を放棄することを意味するだろう。

終章 Woolf の小説における語り手と権威

But, I ask myself, what is reality? And who are the judges of reality?

これは Woolf の旧小説批判、新小説宣言として有名な “Mr. Bennett and Mrs. Brown” 中の一節である。⁽²⁰⁾ このエッセイは人物造型を中心に話が進められるが、この如何にもモダニストらしい問いかけは、小説中の人物を、そして現実描写を読者に提供する語り手に、全面的に認められていた権威に対する懐疑の声とも言える。この懐疑は、単に小説技法上の問題に留まらず世界把握の仕方に関するものである。

語り手の下す判断が客観的で正当な判断であるとする立場、語りが呈示するのは現実に対する正しい解釈であるとする立場は、自己中心的価値観、自己の持つ権威の正当化につながる。Woolf にとってそれは欺瞞であり、現実に対してとるべき態度ではなかった。それゆえ彼女の小説の語りは、小説のコンヴェンションが持つ論理を絶えず解体し、判断の主体の位置を絶えずずらすことをその使命としているのである。

このような旧来の小説作法に対する認識は、例えば *Three Guineas* に示されたフェミニストとしての認識に通じるものである。そこではファシズムとイギリス帝国主義、男性中心社会、愛国心が同根であることが指摘されるのだが、その根拠として挙げられるのが、それら全てに共通する自己中心的価値観、権威による抑圧と差別の正当化であり、それらのイデオロギーが、権力の正当化、秩序化に向けて作用することが強調される。

ここに Woolf 小説の語りのあり方と、フェミニストとしての見地が同じ姿勢で貫かれているのを認めることができる。語りが真実について語る権威を放棄することは、現実から遠ざかるのではなく、現実に対する接し方についての積極的な態度表明であり、それはフェミニストとしての問題意識に結びついている。権威に対する懐疑、そして権威者の言説に対する懐疑は Woolf のフェミニストとしての立場を特徴づけるものである。彼女の語り的手法が目指し、同時に彼女のフェミニズムが目指すのは、価値の相対化による新しい価値の発見、権威の解体による多様な相矛盾する意味の発生であり、その点で Woolf の小説はモダニストのテキストでもありフェミニストのテキストでもあるのである。

それでは語りに対するそのような認識に照らして、Bradshaw に関する部分の語りの質及び怒りの噴出という現象は、どのように評価されるだろう。

まず、この部分の語りは自らの声を前面に出して主張する語りであった。そこに、語りが自らの権威を放棄することによって得た立場から、権威をもった立場への移行が見られる。この移行は先ほどから見てきたように技法上の変化以上のこと、即ち実験的な語りの実践によって自ら否定したはずの立場への退行と捉えることができる。

ところがこの部分の内容に関して言えば、Bradshawが体現する医学の権威が他者に対して行使する権力を批判し、彼の自己中心的価値観によって下される判断を糾弾しているのである。この点は、内容の上では*Three Guineas*において示された立場と一致する。このような体制批判的立場と、作者の声を代弁すると思われる語り手のテキスト支配力が強まった語りとは、内容と形式の矛盾を生み出している。

Herbert Marderは、問題にしている部分に触れて次のように指摘する。

In reacting against the evils represented by Sir William, Woolf became the victim of her own indignation. She could not resist turning the doctor into a caricature. In the process she emptied him of human qualities—the very thing she had accused him of doing to himself.⁽²¹⁾

Marderによれば、この部分の語りが陥っているのは、Bradshawを戯画化することによって、まさにBradshawについて非難した人間性の無視という行為を自ら犯しているということである。この指摘にさらに加えるべきは、この語りの立場が、まさにBradshawについて批判した、権威によって判断を下す立場に陥っているという自家撞着であろう。

このように考えると、Woolfが怒りを顕わにすることに否定的であったのも頷ける。再び*Room of One's Own*に戻ろう。

It is fatal for a woman to lay the least stress on any grievance; to plead even with justice any cause; in any way to speak consciously as a woman.⁽²²⁾

これは女性が小説を書く際の心構えとして述べられているのだが、過去の女性作家たちが経験したような社会的制裁を受けまいという消極的態度から出た忠告ではない。女性の立場での主張を唯一正当なものとして訴えるならば、それは男性中心の価値観を反映する小説同様、排他主義、自己中心主義に陥りかねない。それでは女性が紡ぎ出す言葉も男性の言葉と同じような枠の中に留まってしまうことになる。女性の書く小説が新しい力を得るためには、まずそのような枠を越えねばならない。

むしろこれは、Woolf自身の創作上の立場の表明でもあると考えられる。彼女にとってフェミニストとしての表現は、女としての経験を、そして怒りを直接表わすものではなく、モダニストの表現によって絶えず既存の価値体系を解体し、新しい価値を模索するところに求められたのであった。

このように“one can't propagate at the same time as write fiction”という自戒は、単に女だから怒りを直接表してはいけないという戒めでもなく、また芸術的統一性を重んじるための配慮でもない。モダニストでありフェミニストである自己の思想を具体化する語りの立場を捨てることになるからである。その意味で*Mrs. Dalloway*中のBradshawに関する部分は、Woolfの語りの特質を逆照射してくれる興味深い言説であると言えるだろう。

(注)

*本稿は、第61回日本英文学会全国大会における研究発表「Mrs. Dallowayにおける語り手と権威」に大幅な加筆修正を行なったものである。

- (1) Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (London: Penguin books, 1966), p. 141.
- (2) Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1957), pp. 72-73.
- (3) Anne Olivier Bell (ed.), *The Diary of Virginia Woolf*, vol.IV (London: The Hogarth Press, 1982), p. 300.
- (4) Virginia Woolf, *The Pargiters*, ed. by Mitchell A. Leaska (London: The Hogarth Press, 1978).
- (5) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1977), p. 286.
- (6) *Ibid.*, pp. 288-289.
- (7) Jane Marcus, *Art & Anger: Reading Like A Woman* (Columbus: Ohio State University Press, 1988), p. 138.
- (8) *Ibid.*, p. 132.
- (9) Mary Jacobus, "The Difference of View" in *Women Writing and Writing about Women* ed. by Mary Jacobus (The Oxford Women's Series, London: Croom Helm, 1979), p. 17.
- (10) *A Room of One's Own*, p. 79.
- (11) Patricia Stubbs, *Women and Fiction: Feminism and the Novel 1880-1920* (London: Methuen, 1981), p. 232.
- (12) Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* (London: The Hogarth Press, 1925), p. 162. 以下このテキストからの引用は、本文中にMDと記しページ数を示す。
- (13) *Mrs. Dalloway*におけるSeptimusの機能については、拙論「病める者の目—Mrs. Dallowayに表現された社会批判について」(『ALBION』第35号, 1989年)において論じた。
- (14) Virginia Woolf, *To the Lighthouse* (London: The Hogarth Press, 1927), p. 13.
- (15) Virginia Woolf, *The Years* (London: The Hogarth Press, 1937), p. 307.
- (16) *Mrs. Dalloway*, pp. 109-113.
- (17) *A Room of One's Own*, p. 76.
- (18) *A Literature of Their Own*, p. 277.
- (19) *Ibid.*
- (20) Virginia Woolf, "Mr. Bennett and Mrs. Brown" (1924), in *Collected Essays Vol. 1* (London: The Hogarth Press, 1966), p. 325.

怒りの表現, モダニストの表現——ヴァージニア・ウルフの小説における語りについて

- ②) Herbert Marder, *Feminism and Art: A Study of Virginia Woolf* (Chicago: The University of Chicago Press, 1968), p. 50.
- ②) *A Room of One's Own*, p. 108.

(1991年 8月13日受理)

(のぐち ゆうこ 本学文学部助教授)